

ザ・シチズンズ・カレッジ共催講座

12月14日 銀座フェニックスプラザ

## 『論語』は心のビタミン剤

日々の成長に直結する言葉に出逢う！先人から学ぶ成功法則

生涯学習開発財団が共催する、ザ・シチズンズ・カレッジ第114期第5回講座が、12月14日、東京・銀座にて開催された。

今回のテーマは『論語』。儒教の始祖である思想家・孔子の言葉を、弟子たちが書にしたものだ。誰もが一度は、「子曰わく……」のフレーズを読んだり聞いたたりした経験があるはず。「昔の人は良いこと言ってるな、いつかちゃんと学びたいな」と興味を抱きつつも、漢文を日本語の古文に読み下し、さらに現代語に訳して理解するという複雑さから、遠ざかったままになっている人も多いのではないだろうか。

## ■幼稚園児から大人まで『論語』を素読

講師・安岡定子氏は（銀座・寺子屋子ども論語塾）を主宰し、全国25か所で定例開催している。論語を声に出して読む素読を中心とした、昔の寺子屋式授業だ。なぜ素読なのか。小学生に難しい漢字はわからなくても、読みがなが振ってあれば声に出して読めるし、音として憶えて帰ることができる。大人だつて返り点や置き字を気にせず、ストレスなく読める。

この日の授業も、「子曰わく、吾十有五にして学に志し……」「子曰わく、故きを温ねて新しきを……」と、素読をしながら



講師

## 安岡定子

1960年、東京都生まれ。漢学者・安岡正篤の孫。大人向け・子ども向けの論語塾、講演、研修、著書などを通して、『論語』を人生のテキストとして活かす啓蒙をしている。

孔子という人物や背景を学んでいった。

孔子は約2500年前に生きた人で、そのころの中国は春秋時代と呼ばれる乱世だった。なんとか戦乱を収めたいと思った孔子は、過去の良き時代を徹底的に学び、良き人物の育成が必須との結論に至る。まず自分が猛勉強し、役人として登用されると、外交面で上司を支えたり、優秀な弟子たちの活躍もあり名声を高めるも、50代半ばで失脚。十数年の諸国放浪後に故郷に戻り、古典の編纂や門弟の教育に尽くした。

「……民信無くんば立たず」では、孔子の政治的信念がわかる。弟子の子貢が「統治に必要な、食、兵、民の信のうち止む終えず1つを捨てるなら」と質問し、孔子は「兵」と答えた。「さらに1つ捨てるなら」と掘り下げると、「食」と答えた。国防を棄てて侵略されても、経済が衰退しても、民の「信」さえあれば必ず復興できるといふのだ。高い技術や法律も使う人の哲学次第。現在の日本ではそのバランスが崩れてきていると、安岡氏は警鐘を鳴らす。

## ■持って生まれた自分の善を磨く習慣

論語は約500章からなるが、そのうち「仁」の項目が100以上と最重視されている。誰もが優しさや思いやりを持って生

まれているという性善説で、それを磨いていくことが大事、国難の中においても仁を発揮できるのが君子であると説く。

江戸時代の寺子屋や藩校では、道徳心や強い精神を育むものとして論語の素読が奨励された。現在に至るまで各界の日本を代表する人物に影響を与えているほか、経済、遠慮、忠告、有難など、日本語として定着した言葉も多い。幼稚園児、20代、40代と、解釈はそれぞれ違っていてもいい。良き師は良き習慣。音といっしょに体の中に哲学が入っていくのだ。

## ■グイグイと引き込まれる魅力的授業

祖父で漢学者の安岡正篤は、まだ子供の定子氏に接する時も「あなたはどう思えますか？」と、一人の人間として扱ってくれた。学生時代に漢文のわからないことを質問したときは、書庫に行つて本を広げ、「これに答えがあるから読みなさい」とか、辞典の引き方を見せてくれるとか、答そのものではなく、わからない時にどう解決するかを教えてくれる人だったそうだ。

2015年に、日本通運の社外取締役に着任した。数字に直接関わる立場ではないが、良き人材がいる企業が良き数字を生むとの考えのもと、配達員のマナー教育や女性幹部育成に携わっている。

論語からの学びはもちろんだが、論語に触れている子どもたちの感動的エピソードや、何より安岡氏その人の魅力にグイグイ引き込まれる授業だった。その事実こそ、論語が人を育てる証ではないだろうか。